

# 美術鑑賞教本編集委員会活動報告

田 中 佳 洋

今度の研究大会で、教本編集委員会の仕事を報告する機会をいただきましたので、教本を用いて実際に中学校で授業している立場から、委員を代表して寄稿させていただきます。

## 1. 歴史

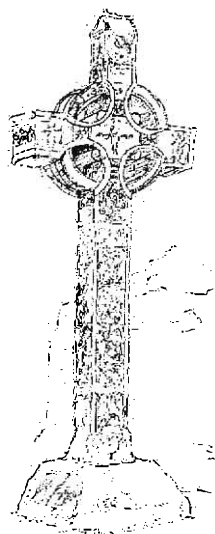
本研究会による美術鑑賞教本編集は、1954(昭和29)年からはじまりました。今年で実に47年目、やがて半世紀になんなんとしています。最初は美術史を中学生に教える本として、作品量を増やすため、図版は全て小さいものに統一されていました。美術史に沿って鑑賞できるように編集した本は、その後改訂を重ねて継続し、現在は「時代別美術鑑賞・美術の流れ」という書名で出ています。

次に、大きな転機として、ただ美術史的に有名だから作品を見るというだけでなく、どこに着眼してそのよさを感じていくか、鑑賞のきっかけをつくるものとしてテーマ別に編集をはじめたのが、1978(昭和48)年のことでした。書名もこれまでとちがう、画期的な鑑賞のしかたを示す意味をこめて「新しい美術鑑賞」と命名されました。最初から日本編、西

洋編の2冊に分けてつくり、改訂を重ねて現在に至っています。ただ、現場の先生方からは時代別編集の要望が根強く、完全なテーマ別編集はなかなか受け入れられないので、この本も時代順の配列を基本としながら、時代の精神や表現の様式、特徴的な造形要素等からテーマを立てて作品を選ぶやり方をしています。

三つめに、1988(昭和58)年に表現技法と鑑賞の資料を合わせた合本がつくられたこと

です。この本は美術科の授業時数の減少に伴い、副読本もこれ一冊で間に合わせたいという現場の要望によってつくられたもので、独立本と比べてページ数などの制約が多いため、私たちが取り上げたい作品を充分に入れられないうらみがあります。そこで作品選びにはかなりの時間をかけ、編集を工夫しています。日本美術と西洋美術という区分を見直して、広く世界に目を向け、ア



ケルトのハイクロス

ジアやイスラム、北欧、ケルト美術、メソアメリカなど世界各地の美術を紹介したり、福祉と美術、環境と美術などの今日的な視点をテーマ設定に取り入れたり、新しい試みをしています。各地の珍しい美術は、海外美術研修旅行で見つけたものなども積極的に用いています。

## 2. 本づくりの手順

### 1. 市場リサーチ

新しい鑑賞本に何が求められているか現行本を採用している現場の先生方の声を各地で拾います。見やすさ、使い勝手など、実際に指導する立場から厳しい意見が寄せられますので、ひとつひとつ検討します。販売に当たる営業部の人たちの意見も聞かせてもらいます。

### 2. 基本コンセプト

新しい鑑賞本でどのような教育的効果を上げるのか、ねらいを検討していきます。新学習指導要領では鑑賞指導を充実させることがうたわれています。そこで何が重点とされているか詳しく読んで分析します。また他社の最近の鑑賞本についても掲載作品、テーマの立て方やページレイアウトなどの編集の特徴を調べ、長所や短所を分析します。こうした鑑賞教育に関する最近の動向を踏まえながら、本研究会の鑑賞副読本としてのコンセプトを明確化します。

### 3. 編集方針決定

本全体のコンセプトを決定した上で、テーマ立てやページの割り振り、目玉と

なるページのアイディアなど話し合い、編集の方針を確立します。

### 4. テーマ案

編集方針に沿ってテーマの案をそれぞれ出して検討します。従来の鑑賞本で採用したテーマもざっと洗い直して参考にします。

### 5. 掲載作品候補

テーマが決まったら、それぞれのテーマに相応しい作品を選びます。これも編集委員各自が原案を持ち寄って検討し、決定していきます。作品選びには普段から美術館や美術図書などで多くの作品を見ておき、絶えず美術情報に気をつけておくことが必要ですが、現代美術やデザイン、工芸では最新の作品をさがす必要がありますので、編集作業が始まってからも足繁く作品探しをしています。

### 6. テーマと掲載作品決定

テーマとしての着想がよくても、実際に作品選びをしてみるとたいして魅力がなかったり、作品が集まらない（リバーサルが借りられない）こともあります。掲載作品候補が使える目途が立って初めて、テーマとともに決定になります。

### 7. レイアウト

各ページのレイアウトを検討します。大きく取り上げたり、小さくたくさん並べたり、テーマによってさまざまな工夫をしますが、余白を大きくとって見やすくするのがポイントです。レイアウトが定まって、文字数も決定します。

## 8. 原稿執筆

テーマごとに分担して原稿執筆にかかります。主にテーマ概説と作品解説の二本立てで書きます。文字数は極力少ないようにしますのでことばの吟味が大変です。原稿を持ち寄って編集会議で読み合わせをします。ここに時間をかけているのが本会の強みです。指摘も多く出て、何回も書き直しになります。苦勞も多いところですが勉強にもなります。

## 9. ゲラ校正

作品と文章がレイアウトされたものが白黒印刷でつくられます。作品の大きさとバランス、文章などの校正を行います。

## 10. 年表など付録ページ

年表など本文テーマ以外の作成をします。比較的自由に構成できる場所ですが、最近はこのページに対する期待や要求も多く、細かい配慮が必要になりました。表紙に使う作品も決定します。

## 11. カラー刷り校正

最終の校正です。色調も修正します。もともと実物の色に近づくようにしてきましたが、美術館での展示が必ずしも理想的な採光状態とは限らないので、最近では明るいめの色調にすることが多くなっています。

以上のように、新しい本一冊つくるのに、およそ月二回、編集会議を持ちながら、半年から一年あまりの時間をかけています。これだけの時間をかけるのは負担も大きいのですが、内容の濃いすぐれた本

づくりには必要なことです。同種の他社本を常にリードしているのは事実で、それにより教育上、質の高い鑑賞本ができるならば、本研究会としては喜ばしいことだと思います。

## 3. テーマによる美術鑑賞

この鑑賞方法は教本編集委員会が積み重ねてきたもので、詳しくは江口・川村先生共著の『美術鑑賞事典』をご覧くださいのですが、簡単に説明しますと、美術作品を見るのに、作者がだれで、いつの時代で、様式はどうでと、知識から入るのでなく、あくまで作品そのもののよさを感じるころから出発できるように、そのきっかけをつくるのが目的です。

例えば、造形の要素や表現の方法をテーマとしたものに、「線とタッチ」「色のひびきあい」「絵の奥行き」「光の演出」「かたまりと空間」があり、主題や内容をテーマとしたものに、「画家の自画像」「生活をかく」「夢と幻想」があります。しかし前述のように、完全に美術史を無視することもできません。

美術史上、これだけは最低限おさえておきたいところを選ぶ中で、その時代の様式や造形の精神をテーマとしたものに「理想の人体美」「自然と人間へのめざめ」「シルクロードと奈良」などがあります。テーマ名即ちタイトルとして目次に並びますから、中学生が読んで興味を持てるように、ことばを平易でわかりやすいものにくだいて使います。上に紹介したテーマ名は長い間使ってきた代表的なものですが、現在編集している新版で

はさらに興味をそそるものにしようと工夫中です。

掲載作品は、テーマごとに2ページから4ページ用いて、そのテーマに合致したものを配列します。タッチなら、さまざまなタッチの作品を集めて、比較しながらその表現の特質や効果が理解できるように編集します。いくつかのページでは、この作品を見たらほぼテーマとしていわんとすることがわかるように、目玉となる作品を大きい図版で取り上げるなど、構成にメリハリをつけます。

#### 4. 苦あれば楽あり

大きな責任を負っている仕事ですから編集作業が始まったら全力投球しています。とはいえ、勤務校の仕事を終えてから取りかかるので、期限に間に合わせるため連日深夜に至ったり、休日の時間を全部調査や執筆に当てたりと、なかなか厳しいものです。

曖昧なことは書けませんので、1枚の原稿を書くために、しっかり下調べが必要です。ペンをとって書く時間より、美術書をひっくり返して読む時間の方がはるかに膨大です。

しかしどんなに苦勞してもやめたいと思ったことは一度もありません。この仕事のおかげで幅広く色々な作品に接することができ、幾度となく目を開かれました。現代美術の場合、私たちが興味を感じて取り上げたときは新進作家のひとりだった人が、今では押しも押されぬ世界的なアーティストになられた例もあり、自分たちのみる目をひそかに自慢にして

楽しんでいます。

作品集め、資料集めに際して、そうしたうれしい話がいくつかあります。工芸については名工とよばれる職人さんのお話が聞けたのも印象的です。教科書に準ずる教育のための本づくりということで、ご厚意をいただきました。陶器のメーカーで渉外担当の人が偶然芸大出身の人で、大変親切にご協力をいただいたこともありました。

もとより、勉強のためと思って参加した教本編集委員会ですので、この仕事をしていて自分の肥やしになった点は計り知れないほどです。鑑賞教育に興味を持ち、自分の中学校での実践に生かせることがその最大のものです。正直なところ、以前は自分の専攻した日本画や、とくに関心のある作品を見るくらいでしたが、この仕事に関わって必要上調べているうちに、世の中に実にさまざまなすばらしい美術作品のあることを知りました。

海外研修旅行にも参加して、ロマネスクやゴシックの大聖堂に接したときの驚きは未だ薄れません。

ルーブル美術館にて、図版で見慣れた名作がそこかしこにあって、まるで室の山に分け入ったかのような、身内がふるえるほどの感動も大切な思い出です。西洋絵画では巨匠とされるルーベンスも、自分には合わないと思ってさほど興味を持っていなかったけれども、大阪城ホールのように広いルーベンス展示室で実物（『マリー・ド・メディシスの生涯』連作）に接しての圧倒的な芸術的迫力に、西洋絵画恐るべしとの感想を抱きました。編集作業をしていなかったら、このよう

な場所へも来る機会があったらと思えず、きっと見過ごしてしまっただろうことがたくさんあります。

現代美術なども、関西にいても見るチャンスは多くありますので、たびたび出かけるうちに、一目見てぐっと揺さぶられるという作品にしばしば出会いました。逆に何も感じられないものもあり、作者がだれとかの先入観などにとらわれないで、自由に自分の感覚で楽しめばよいのだと知ったことから、現代美術をみるのが大好きになりました。もちろん日本画の世界に心ひかれることも変わりなく、まるきり異なるさまざまな美術の世界があることを知り、楽しみが広がったといえます。

学校でも、ぜひ子どもたちに幅広く美術のよさを知らせていきたい欲求からられています。試行錯誤しながらも、子どもの予想以上の反応に元気倍増して、自分なりの鑑賞指導のノウハウもできてきました。

美術作品をじっくり見るという機会を持ち、その感じたことを発言したり記述したりの方法で外に出せるようにしていけば、生徒は生き生きと鑑賞活動ができます。そんなときの生徒の感受性の鋭さには、しばしば目を瞪ります。表現活動のために従属的に鑑賞があるのでなく、鑑賞によって美術を見る目を育てることが、表現の創造的な活動を支えることになるという確信を深めています。

## 5. 鑑賞授業の実例

私の勤務校で、実際に教本を使っ

て授業も毎年の指導計画に位置づけてやっておりますので、この後で取り組んできた鑑賞授業の実例を紹介いたしますから、ご参考にいただければ幸いです。特定の分野に偏らないという意味で、現代美術と日本の古い美術の二例で、鑑賞しての生徒の声をあげておきます。

ウォーホル 『キャンベルスープ』、  
『マリリン＝モンロー』を鑑賞して

1年3組

・ウォーホルの作品は、美術作品といえるのでしょうか？

肯定派「美術作品だ」

Nくん：パクリになっても自分の好きなものを好きなように描いている。(ウォーホル)は自分の描きたいようにスープ缶やモンローを描いている。)

OKさん：キャンベルスープの缶を描いて人に見せようと考えたのはウォーホルだし、この作品の構図(見せ方)は作者自身のアイデアだから。

Hさん：あたりまえのことだけど、絵って感じだから。

Sさん：今までだれも描かなかったようなものを描いただけであって別にパクリじゃないと思うから美術作品だと思う。

Tさん：少しだけ美術作品だと思う。ウォーホルが思うがままに描いたから。

Mさん：美術だ！マリリン＝モンローや缶詰など、(想像したものでなくて)実際にあるものだが、それはそれなりにいいと思う。

否定派「美術作品じゃない」

Nさん：美術じゃない。けれどこれはウォーホルから見たマリリン＝モンローのいろんな感情を表しているんだと思う。

ONさん：あまり美術作品とはいえないと思う。自分の想像力をほとんど使っていないし、肖像画と言うわけでもない。だから美術作品とは認めがたい。

CHくん：もともとある商品のデザインをパクっているから、美術じゃない。

Nくん：まねをしているから。

Tくん：何といっても盗作だし、自分の個性がまるでないから。

Mさん：どこにでもあるものだし、だれでも描ける。

Kさん：同じような形を色を変えてたくさん並べているだけだから。

わからない派（どちらともいえない派）

Hくん：そのまま缶詰を描いているなら美術作品ではないと思うけれど、もしかして想像して描いてあるかもしれないし、ウォーホルの考えもあるからどちらともいえない。

Nさん：世の中に出回っている品物を、自分なりに絵で表現していると思う。それなら美術作品といえる。でも世の中に出ていて、みんなが知っているものをそのまま写しただけだから、盗作に見える。盗作ならば美術作品でない。

NZさん：私は、この絵について全く理解できない。分からない。

Yさん：他人のデザインをとったけれど、人がやらなかったことを初めてやったし、いちおうこれを考えたのはウォーホルさんだから、よく分からない。

・ウォーホルの2つの作品を見て感じたことは何ですか？

気づいたこと

Yさん：2つの絵は描いているモノが有名だ。同じモノばかりたくさん描いている。

よいと思ったところ

ONさん：みんなが実際にやろうとしたことを、実際にしてしまったところ。

CHくん：発想がおもしろいところ。

TNくん：いろいろな色をたくさん使って同じ形をくり返し描いたところ。

Nくん：缶の方は人によって意見が分かれると思う。マリリンは人を引きつける。

OKさん：同じモノをたくさん描いているが、少しずつ違っていること。みんなによく知られているモノを描いたこと。

Hさん：同じモノが少しずつ違うように描かれているところ。

Uくん：写真のように正確だ。

Nさん：美術ではないが、よい作品だと思う。女優やってるモンローの素顔を色で表したんじゃないかなーと思う。

Sさん：だれも思いつかなかったようなことを描いているところ。

Mさん：自分の好きな物を描いている。

Yくん：有名な物を種類をいっぱい分けて描いているところ。

Mくん：スープやマリリンの魅力を引き出しているところがよかった。

Yさん：缶詰の方は、ひとつを大きく描いているのではなくて、いっぱい描いているのが、そのスープへの思い（好き、思い出など）がよく描かれている。

よくないと思ったところ

TNくん：コピーみたいなどころ。

OKさん：モンローがこわい。

Iくん：モンローが気持ち悪い。

Uくん：同じモノがいっぱいだ。

Mさん：人の考えをパクった。

わからないところ

ONさん：モンローをいろんな色で表したり、スプーをズラズラ並べたところに何を感じたらいいのかわからない。

Sさん：同じ物を何回も描くのはなぜ。

Mさん：ただ好きな絵を描きたかったのかな。

・ウォーホルの言いたかったことは何だと思いますか？

ONさん：誰にでも描けるようなモノだけど、こういう発想には個人の描きたいという思いもちゃんと入っているんだ。

CHくん：美術は発想がだいじだ。

TNくん：同じ絵でも違う色を使うとこんなふうになるんだ。

Hくん：そのモノの色を変えたりするだけで、美術作品と見せることができる。

Nくん：美術は絵でなく心だ。

Hくん、SGくん：美術はいろいろある。

Nくん：ふだん見ているモノや人を、これだけ描ける（と自慢している）。

OKさん：同じモノ（を描いても自分の）個性が出せるということ。

Uくん：同じに見えるがよく見ると全てが違う。

Nさん：マリリン＝モンローはこんなんだ！ということの色で表した。本当に怒ったモンローとかを、色で表し、素顔を

表したかった。

Sくん：うまいだけが絵じゃない。

Hさん：美術を知っている人にこんな描き方もあるんだよといいたかった。

Tくん：できるだけそのものに近づけていきたかった。

Nさん：缶詰の方はよくわからんが、モンローの方は10種類の顔があって性格がころころ変わるということを表現したんだと思う。

Mさん：ぼくはこのスプーが好きだ！！

TKさん：同じモノでも一つ一つ個性があるということと言いたかった。

Hさん：少しずつちがうように描くことによって、感じ方がちがう。

Iくん：缶詰の場合一つ一つがちがうということ。

Yくん：有名なものでも、種類を細かく描くとすごく奥が深くなるということ。

Yさん：モノを大切にしましょう。

Sさん：これからは自分の好みのモノをもっとふやしてほしいとウォーホルはしている。

退蔵院『瓢鮎図』を鑑賞して

2年1組

1. 『この絵の作者が表したかったこと』

・ひょうたんでなまずはつかまえられない。（なまずはぬるぬるひょうたんよりなまずの方が大きい。つるつるとつるつるでさらにつるつる）

・無理なことをやろうというチャレンジ

精神を表している。

・無理だとわかっているのにナマズをつかまえるといういっしょうけんめいな男の気持ち。

・なまずは頭をつかわないと取れない。

・無理なことはやめておこう。

・本当はひょうたんではナマズはとれない。わけのわからないことがひょうたんなまずだといいたかった。

・酒の飲み過ぎに注意してほしい。(瓢箪は酒の器。男は飲み過ぎて変な行動をしているという意味)

・「百聞は一見にしかず」を自分で証明したかった。

・ひょうたんなまずということわざをもとに、とらえどころのない、そのころの何かについての批判を表している。

・この世の中には不思議なことがいっぱいある。それは身近なことでもある。

・昼になまずが動いているので、地震が起こる前ぶれを表している。

・昔はなまずが地震を起こしていると思われていたから、なまずをこらしめて、地震を起こさないようにすること。

・何かが起きたら、すぐだれかのせいにしてはいけない。(この絵の時代は地震をなまずのせいにしていたから)

## 2. 『きょうの鑑賞授業の感想』

・いろんな想像ができてよかったと思う。細かいところもじっくり見れた。

・この絵を見たのは初めてだったけれど、いろんなことが分かっておもしろかった。ひょうたんでなまずをとるなんて不思議

な感じがした。

・なるほどと感じさせられたりこの絵はストーリーがあるのだと思った。今思えばおもしろい絵でいろんな考え方や見方などが出てくるしこういう絵はけっこう楽しくなってくる。服装など昔のくらしもよくわかった。

・絵をよく観察することがだいじだ。おもしろいところに気がつくのには時間がかかった。

・ことわざを絵で表すととても分かりやすい。

・昔の人は、いろいろむずかしいことを考えているんだなと思った。いろいろな表現をしていて、それを絵とかにして、すごい。

・日本美術は奥が深いな。

・絵はじっくり見ないと絵の中身が見えてこないなあとと思った。この絵は何となくひょうたんとナマズが戦っているような感じがする。

・水墨画というと、風景画だけかと思っていたが、こんな奥の深い絵もあるんだなあとと思った。

・みんなで考えると、よい意見が出るのでよかった。

・単純そうな絵に見えたけど学習したら色々なおもしろいことがあった。男がナマズをつかまえようとしているところはすごく印象的だ。無理なのにかんがっている姿がおもしろい。

・この絵は無理がありすぎて、おもしろかった。最初は、なんやとか思ってたけど、勉強していったら、どんどん楽しくなってきた。



・何を表しているかいろんな解釈ができる絵であり、いっぱい考えることができ、たくさんの方ができてよかった。この絵の場合は描いた人は笑いながら見ていたんだろうなあと思う。

・今日勉強した「ひょうたんなまず」は日本画のかたくるしいイメージとはちがって、おもしろみがあって楽しいものだと思う。だから他にもこのような日本画があれば見てみたい。

いかがですか。このように展開していくと、生徒達はいっしょうけんめい絵を見ようとしています。絵を見ながら考え、また自分の考えを確かめるために、さらに絵をよく見ようとしています。そうしていくうちに、聞いていてもなるほどと思われる意見がたくさん出てきて、新しい発見があったりしてますます楽しくなります。

『キャンベルスープ』の鑑賞では、「これは美術といえるかいえなから」という問いかけをしたところ、「美術ってなんだろう」「こういうよさがあるから美術といえるんだ」という意見が出て、自分の目でみて、美術作品の価値を決めるおもしろさを体験できました。現代美術はこちらが予想する以上に、生徒は興味を持てるようで、素直に感じたまま、思ったままに率直に意見を出してくれます。『美術資料』から現代美術について好きな作品を選ばせたところ、ひとつの作品に人気が集中することはありませんでした。さまざまな傾向の作品を集めて編集していましたので、生徒ひとりひとりの感じ方のちがいが、結果に表れたの

だと思っています。

ここで述べておきたいのですが、鑑賞の授業は教師の見方を押しつけることになるという意見が従来ありました。しかし押しつけにならないように授業展開する工夫はいくらでもあるのです。

いつも鑑賞の授業の最初に話すことですが、「美術の見方には正解ひとつということはない。」と「自分の感じたことを率直に発言してよい。」との二点をおさえて、あとは自由に発言できるふんいきを保つようにします。そうすれば生徒は感じたことを臆せず発言します。その中で、生徒は「自分とちがう意見がたくさんあるな」とか「そんな見方もできるのか」と他の生徒の意見を聞いて触発され、さまざまなちがった感じ方のあることを理解します。それは瓢鮎図の鑑賞のときにも事後の感想の中に出てきています。

『瓢鮎図』の鑑賞では、水墨画のイメージが改まって、日本美術もおもしろいもんだなという感想が出ています。浮世絵などの比較的親しみやすい日本美術でなく、水墨画で鑑賞授業したらどうなるだろうか、やってみなくてはわからないというくらいの気持ちでしたが、結果は予想以上でした。

## 6. 鑑賞体験のたいせつさ

実際のところ、わたし自身が若い頃水墨画のよさがよく分からず、何だか堅苦しいなあという思いこみがありました。日本画をやっているながら、水墨画は古臭

いものとして顯みなかった覚えがあります。それがあきつかけで水墨画はすごいぞと見直したことがあります。模写室にいた頃ですから、3回生の終わりぐらいだったと思います。たまたま博物館で（今熊野のときは近かったので、クーラーがきいた博物館によく涼みに行きました）李唐の山水図を見たのです。松の木を前景に、滝が中心に描かれた絵です。

見た途端、滝に打たれたようでひやりとしたので、おやと思ってしばらく絵の前にくぎづけになり、なぜかよく分からなかったけれど、とにかくこれはすごい絵だぞと感じてしまいました。いわゆる直観的に惹きつけられるという体験だと思います。こんなことがあってから、水墨画もていねいに見ようという気になりました。

今では雪舟の絵が群を抜いていることが納得できますし、宋代水墨画のすごさにも心から感服しています。確かに、水墨画はある程度年齢が加わらないとそのよさは分からないことがあると思います。でも同じ作品でも、作者の見る目の変化とともに、見られ方、感じられ方も変わってくるのは当然じゃないでしょうか。年齢とともに見えるものもちがってくるのなら、また美術作品をみる楽しさも増していくというものです。そこで、だいたいにしたのは鑑賞体験の積み重ねだと思います。

美術史を教えることが鑑賞教育だという誤解がなかなか無くなりませんが、知識というものは、ある作品に興味をもって見ていくうちに、さらにその見方を深めていく上で参考にするのが効果的です。

生徒がその作品をよく見てもない、関心も持っていない段階で知識を与えても、効果的ではありません。「この絵はピカソだよ。」とって絵を見せて、「これがピカソの絵か。どれどれ」と身を乗り出す子どもがどのくらいいるでしょう。ですから、絵をじっくり見た。→感じた。気がついた。→おもしろかった。→美術をみることに興味、関心が増した。という経験の方がたいせつなのです。そのような経験を重ねることで、自然に鑑賞の力が高まってきます。

たとえ中学校の各学年で一回ずつでも、そのような体験があれば、美術に対する理解が変わってくると思います。

私の勤務校では、学期に一回の割合で、一回につき1～2時間使って鑑賞授業をしています。教本の使い方としてはテーマを選んで取り上げるのが基本ですが、ページ全体の作品を見ていくこともあれば一点だけ取り上げることもあり、使える時間によって柔軟にしています。

こちらが「絵のどこそこを注目して」という指示したい場合に便利のように、鑑賞作品の図版（拡大コピーで大きくしたもの）や実体投影機などのツールを利用します。

## 7. やりやすい鑑賞題材（作品）

これまでどんな作品を鑑賞授業で取り上げたのかを述べておきます。『瓢鮎図』はユーモラスなところもあって、謎かけみたいにして生徒に見せていくことができそうだと考えて取り上げました。謎かけといえば、「これは何だろう」、「こ

れは何をしているのだろうか」、「どんな状態なのだろうか」、「いくつあるのだろうか」といった問いかけをすると、生徒は答えるために絵をよく見ることになります。だから、いくつもの疑問を解きながら展開していけるような絵は、ひとつの絵をじっくり見れる時間が持てて印象も深められます。

抽象絵画や現代美術のように具体的な形が再現されていない場合は、色や形、表現の方法などのちがいや特徴を見つけしていくようにして、いくつもの作品を比較しながら見ていく方法が使えます。要は、指導する先生がこれ子どもに鑑賞させたい。と思う作品があれば、子どもがじっと見て、意見を出せるような展開を工夫することが肝要です。

## 8. 鑑賞教本の意義 ふたたび

生徒に実物を見せることの意義は否定できません。しかしだからといって複製での鑑賞は実物鑑賞より劣る→複製の鑑賞は意味がない。という主張は賛成できません。かつて白樺派の文学者は当時の石版刷りで紹介されたゴッホやルノアールの作品に深い感銘を受けたと聞きます。印刷技術が格段に進歩した今日、条件はさらに整っています。複製では感動でき

ないというなら、その人の感性の問題です。鑑賞教本のような複製には、自分のペースでじっくり見れるという長所もあります。

日本美術のすぐれたものも、美術館にあるものは一部で、仏像のように寺院にあって現在も信仰の対象になっているものも多くあります。そんな場合たいていは堂内が暗かったり、近寄れなかったり、平常は見られなかったりしています。

彫刻のような立体作品は、実物をあらゆる方向から見るのがベストですが、すぐれた写真家による写真の方が大きな感銘を受ける場合もあります。

海外旅行も普通になった現在、鑑賞教本で見て、いつかは本物を見たいという夢が持てれば、そう遠くない将来に実現できます。

そう考えていくと、中学生の多感な時期に鑑賞教本でさまざまな美術のあることを知らせておくことや、鑑賞の授業で美術への関心を高めておくことは非常に意義のあることと理解していただけるでしょう。

美術教育の意義が問われている今、美術の先生方の創意工夫を、ぜひ鑑賞教育においても發揮していただきたいと思えます。その際は本会の鑑賞教本を、よろしく願いいたします。